

巻頭言

将来に向かって夢のある研究体制に

関西支所長 金子 繁

最近、米国のある菌類研究者から、「サバティカル休暇を使って、スペインの研究所へ家族を連れて1年間行く。」との連絡を受けました。彼はその分野では世界をリードする研究をしてきましたが、さらに新しい技術の習得のためにサバティカル休暇を使いたいとのことでした。私たちにとってはうらやましい限りで、日本はまだ全体的な研究レベルでは世界のトップには立てないかもしれないとつくづく感じました。

私たちの研究所も、独法化に伴って研究体制の変革が行われました。競争的に獲得する大型のプロジェクト予算は増えつつあると思います。機関及び研究員の評価体制もできました。しかし、これで万全かという、そうでもないように感じられます。研究課題の見直しや、組織の改変に際しても、期限に追われ、バタバタと構想が作られてきたように感じます。しかし今、決してバタバタとではなく、楽しい夢を描きながら、将来を見据えて考えることも必要ではないでしょうか？

研究体制といっても、いろいろなことがあげられると思います。真剣に考えなければならない点として、本・支所を平均すれば、研究管理または支援業務のために、全研究職員の7人に1人は研究の第一線を離れなければならない現在の体制なども、いつか検討すべき対象ではないでしょうか？ この辺は、民間等の研究機関のあり方も参考になることがあると思います。

今、多くの独法の研究機関が国民に成果を分かりやすくアピールしています。それと同様に、将来を考えるには、内部のものだけではなく、広くいろいろな分野の人々の声を入れてゆくことが必要だと思います。現在、多くの人々がいろいろな意味で森林に夢を託しているのは確かになってきていると思います。公の資金で研究を行っている私たちが、その人達の夢が叶えられる研究体制に向かうのは当然でありましょう。実施している研究が、国民にかかわる産業・文化や科学の発展にどのようにかかわるかは、明快に、自信を持って答えられなければならないと思います。そのために、将来に向かって夢のある研究体制を描いてゆくことが必要です。夢の描画には、研究所の将来を背負ってたつ若い研究者にも考えてもらうことが不可欠です。研究所が創立されて100年という年も近づいています。その次のステップのために、あわてずに夢を描いてゆく時期が来ているのではないのでしょうか？

